

国内研修レポート

今回の研修の目的は「住宅型老人ホームの暮らしの自由について」であった。在宅ケアと施設との中間地点にある住宅型老人ホームとはどのような施設なのか、今回は鹿児島県始良市にある鹿児島エスプリあいらにてボランティア活動を通して住宅型老人ホームの暮らしについて調査した。研修期間中は利用者と同じ施設の空き部屋で寝泊まりをした。ボランティア活動の内容は傾聴を軸とするものであったが、東京にいる間に企画した夏祭り、スイカ割り、流しそうめん、手話教室といった内容も行った。施設側との話し合いや企画のすり合わせなど、困難も多くあったが今回の研修テーマとは関係がないので割愛する。また、施設側のご厚意で特別養護老人ホームまもりえと小規模多機能施設さざんか園の見学も行った。これはボランティアではなく、どちらも一時間くらいの施設見学と説明会である。これらを比較して今回のレポートとしたい。

鹿児島エスプリあいらの暮らし

エスプリあいらで私たちが寝泊まりをした居室はなかなか広く快適なものだった。施設感がある間取りと色合いだったが、広さについては申し分なかった。見学させてもらった利用者の部屋も思い思いのアレンジが施され、テレビや棚などを配置してもゆったりとしたスペースが確保されていた。部屋によっては洋室になっていたり和室をイメージした畳なども置いてあり、利用者の特色がよく出ていたと思う。

食事については利用者みなさんととてもおいしいと満足した様子であった。加齢や気分によって食べない人は見られたものの問題はなかったと思う。おそらく時間による水分補給がよくなされていて、人によってはとろみも使用された飲み物がでていた。これは施設ならではの取り組みで在宅では頻繁な水分補給は難しいと感じた。

デイサービスで印象に残ったのが、外出についてである。月に一度くらいは希望者にデイサービスの活動としての外出が行われるそうだがそれ以外は施設から出ることはなさそうだった。私が利用者に「今日も暑いですね」と話しかけたとき「私は一日中施設にいるから外の暑さがわからない」といわれ、ほかの利用者も「そうねえ」と共感していた。住宅型老人ホームの利用者がデイサービスに行くというのは、在宅に言うところの「外」であるかもしれない。しかし、デイサービスまでは施設の中で繋がっている。これでは「外」という感じもなければ、「食堂に行ったらみんながいた」ということの延長線上にすぎないくらいの認識だろう。施設内で衣食住が賄えてしまうあたり、在宅型老人ホームが本当に在宅と施設の中間地点であるのかという疑問を感じた。

特別養護老人ホームまもりえの暮らし

まもりえはユニット型の施設で四つのユニットにそれぞれ 12 個の居室があった。特別養護老人ホームであるまもりえは介護保険上の都合でデイサービスは使えないそうだ。日中の余暇活動についてもっと詳しく聞きたかったが、今回の説明では叶わなかった。デイサービスがない分、生け花教室などの取り組みが隔週であるが行われている。喫煙や飲酒については、エスプリあいらでは両方とも不可であったが、まもりえでは飲酒は許されていた。

まもりえで特にこだわりを持っているのが「施設の暮らしの中でも在宅を演出すること」と感じた。外観はガッチガチの施設であるし受付もあってエレベーターもあってと施設という感じは強くあるが、こだわりを持って在宅を演出していた。例えば、それぞれのユニットには古民家のような玄関があり、傘立てや靴入れ、それっぽい置物まで置いてある。当然ユニットに入るときは施設から施設への移動にすぎず靴を履き替えることもない。普通の家の玄関の扉がある日なくなってしまうたら大慌てであるが、ここの玄関の扉は扉としての機能はあまりないだろう。それでも施設での暮らしを在宅に持っていこうという努力が強く感じられた。他には、ユニットごとの食堂には醤油さしや簡易的なごみ箱、一般家庭にある家具はだいたい揃っていたり、お金を使える喫茶店や図書館、花や木、水がある公園を演出したスペースもある。特に土を使った木や花を施設内に配置するのは、見た目以上に手間がかかるものだと思う。しかし、そのような小さな努力は確実に利用者により影響を与えていると感じた。

まもりえで印象に残った話に忙しい様子を見せないという取り組みがあった。どんなに忙しくても会った利用者さんには声をかけたりして、バタバタした様子を見せないのである。この取り組みの意味は、忙しい様子を見せないことで利用者が話しかけやすくなるそうだ。トイレに行きたいでも物を取ってほしいでも忙しくなくバタバタしている人には話しかけにくい。それで生活の QOL が下がってしまわないようにという工夫であった。利用者が施設でのびのびと暮らせる工夫としてこの取り組みの効果は大きいと思う。

小規模多機能ホームさざんか園の暮らし

小規模多機能ホームとは在宅にしてショートステイやヘルパー派遣、デイサービスを兼ね備えた施設である。このさざんか園が大事にしたのは、小規模だからこそできる「温かさ」である。さざんか園ではヘルパーに来る人もデイサービスに来る人も顔なじみな人で家族とも顔が見える良い関係を築こうと心掛けている。そのため、家族が介護疲れを感じているときには、気軽にショートステイを申し込めたり、また提案することができる。多機能ということも含めておおよそ介護に関する知識、体制は万全だと思えた。まさに在宅で暮らしながら、介護に関するスペシャリスト達が身近にいて相談ができるといった非の打ち所がない環境であった。ショートステイの部屋を見させてもらったが古民家を改築したような部屋であった。ショートステイの想定で作られてるためか壁がなくカーテンで仕切られてはいたものの、十分なスペースが確保されており申し分なかった。フローリングの部屋に昔

ながらの家具があるため、好感が持てて、進んで泊まりたいという人もいるだろうと思う。

この施設の説明は、業務内容が多岐にわたるため説明に時間が取られ、あまり詳しく聞くことができなかった。それでも 20 年以上この土地で小規模多機能施設として機能してきた実績は、説明よりも説得力が強かったと思う。高齢者がいる世帯では家族間のみで抱え込み、疲弊していき生活の QOL も落ち続けるという。それは認知症という病気があり、また寝たきりや車いすといった現状があるから当たり前だろう。なにもかもが嫌になる前に持続的な高齢者との向き合い方を知ることができ、実行できて、なにかあっても相談がしやすいというこの上ない環境であった。

まとめ

今回の研修を通して私が感じたのは、住宅型老人ホームといっても特養と大差はなく、在宅的なケアは在宅でしかできないということである。やはり施設側がどんなに在宅的ケアを謳っても包丁も握らせてもらえず、玄関までの距離が遠く、なにより玄関から勝手に出てはいけないのなら、どんなに居室を自由にアレンジできようと在宅ケアは難しい。施設を非難しているわけではない。施設で満足している高齢者も多くいるし安全で安心できる老後を送れるのは施設の強みだろう。これからの施設は、特養まもりえがそうだったように、いかに在宅ケアに近づけることができるかが、老後の施設での QOL というのを上げるのに大切なことだと感じる。住宅型老人ホームも介護度が低く、認知症も軽度なことを考慮すれば、「危ないから」といってさせてこなかったことももっとできるようになると考える。

最後に今回の研修テーマは「住宅型老人ホームの暮らしの自由」であった。結果論的に言えば住宅型老人ホームだから特別にすごいところがあるというわけではなかった。しかし、研修先のエスプリあいらは今年の 3 月に始めた新しい施設である。施設の基本的な機能は備えているため、ここからの住宅らしい工夫や特養などにはない強みを見つけられるかが焦点だと思う。生活の質の面で他の施設との差別化を行い、住宅型老人ホームらしい在り方を見つけ出してほしい。